

みんなでトークオーバー・人権こども塾文化祭2023

日時:2023年11月5日(日)12:30受付開始13:00~16:00

場所:徳島県立二十一世紀館イベントホール(文化の森内)

第1部 人権こども塾「自分を語る」学習会発表会

《開会あいさつ:吉成正士》

(開会を知らせる音楽の終わるのを待って、ゆっくりと一言一言に思いを込めながら)皆さん、こんにちは。只今より、「みんなでトークオーバー人権こども塾文化祭2023」を開催させていただきます。

(語りの度に丁寧にお辞儀をしながら)本日はお忙しいところをお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。私は、共同代表を務めております吉成と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

会に先立ちまして、本日、NHK松山放送局から撮影の取材に来ておまして、カメラが回っておりますので、もし、カメラ撮影が難しい方がおられますようでしたら、ご連絡いただけたらと思いますが、どなたかおられますでしょうか。(会場を見渡しながら)大丈夫でしょうか。ありがとうございます。

(明るく力強く)それでは、早速ですけれども、只今より第1部(前に掲げたテーマを振り返り、確認しながら)「人権こども塾 自分を語る発表会」としまして、進行を前の2人にマイクを渡したいと思っております。どうぞ、よろしくお願いいたします。

《進行あいさつ:藤原莞大・有井温人》

(元気よく、2人で声を合わせて)こんにちは。(会場から「こんにちは」声が返る)本日の司会を務めさせていただきます、藤原と有井です。

今から第1部である「自分を語る人権学習発表会」を始めたいと思います。自分を語る学習は、人権こども塾メンバーが常日頃から取り組んできた学習です。私たちが思い思いに語る姿やメッセージを感じてみてください。

それでは、あーちゃんさんの語りから始めて、壇

上での語り合いをしましょう。よろしくお願いいたします。



《あーちゃん》

(緊張の中、原稿を見ながら懸命に、しっかりとはっきりした口調で)私の過去と現在。私の過去は、現在とは全く違うものでした。まるで夏のジメジメとした空気感のようでした。「ああ、この私の中の空気感を、誰か吹き飛ばして!」と、私は心の奥底で思い叫んでいました。

ですが、私が中学1年生になると、初めて「人権」と出会いました。ある先生の授業で、「総合」の時間に各学年でおこなっている「全体人権学習」の科目で、私の心にグサツときたその学習内容は、「人権問題」です。

人権問題といっても様々な物事がありますが、私は過去に「見た目差別」を受けていたので、その、ある先生の授業を聞いていて、私の他にも、差別を受けている方が数えきれないほどいらっしゃるんだなと思いました。その授業を終えて、私はある先生のように、「いろいろな人々に人権をつなげていけるような人間になりたい」と思い、はや1年。

そして今、友達などやその先生から勧められ、現

入っている「人権こども塾」に出会いました。入った当時は、まだ発表があまりできていなくて、でも、愉快的こども塾メンバーと共に、様々な学習をしたり、楽しいことをしたり、新しい友達や仲間をつくって行って、今現在の私は、今、この舞台に立っています。

私は、過去の自分より多く生まれ変わることができました。そして私は、はるか遠くの未来までこの思いを送り続けていきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

(拍手の後、「誰が次喋るの?」という迷いの中、さくらさんが立ち上がりマイクを受け取る)



《さくら》

私は「人権こども塾」に入って、(まっすぐ前を見ながら、言葉を懸命に紡ぎ出しながら)あーちゃんさんと同じく、すごい良かったなと思います。「人権こども塾」に入ったおかげで、発表できるようになったんです。

(緊張の中でも、身振り手振りを交えながら)この後、スペシャルトークをしてくださる森口先生に、(照れくさそうに)半強制的に当てられるような気が私にはするんですけど、それでも、どうにかして私にしゃべる機会を与えてくれる。昔は、自分からしゃべり出すことが得意ではなかったので、まあ最初は結構戸惑って、「どうしようかなあ…」「話すことないなあ…」みたいなものがあるんですけど、言葉にして話すのが難しいんですが、皆さんもそうなることがあるんじゃないでしょうか。

私は、でも、どんどん当てられて話していくうち

に、だんだん話せるようになってきて、(言葉を絞り出しながら)今、発表しているのも結構緊張して。(照れくさそうに)朝はあまりご飯を食べられなかったんですけど、でも、今「人権こども塾は良いところだよ」ってことが言えていることが、すごくいいのかなと思います。

それから、(考えながら)ハンセン病のことなんですけど、それについてちょっと話したいんですけど。私が初めてハンセン病のことについて知ったのは小学6年生の頃です。当時は担任の先生が「らい病が」とか、すごく軽くしか言ってくれなかったんです。

その頃は、「ハンセン病療養所」なんて全く知らなかったし。でも初めて、中1になって吉成先生とお会いしたことで、いろいろ教えてくださって。群馬の「栗生楽泉園(くりゅうらくせんえん)」っていう所をご存じでしょうか。吉成先生が行ったというお話をしてくださり、その話を聞いていたんですけど、(話を懸命に思い出しながら)その「重監房」という所で、とんでもないひどいことをされていたっていうことを聞いて、「ひどいなあ」と思いながら軽く聞いていたんですけど、でも凍死することが多かったみたいです。凍死って、実際すごい辛いと思うんです。それにも耐えて帰って来れたりした人は、すごいなあと思いました。以上です。(拍手)

《進行:藤原莞大》

失礼しました。進め方が不手際だったようで。(感謝を込めて手を合わせながら)あーちゃんさんとさくらさん、発表ありがとうございました。

ここで、一応説明させていただきます。この、各自が胸につけている名札ですね。(演台から離れて、名札が会場の参加者に見えるように掲げながら)この名札は、今日、発表する方々の本名とは違って、あだ名のようなもので皆さま呼んでいますので、向こうの、「クマガヤさん」「味噌汁さん」とか、そんな感じです。ボクは「ちーさん」(隣を示し)こちらは「アッチャン」だったりします。

それで、今話してくれたように、自分の「意見」、「話」とか「感想」とかを、話す予定にしています。

そして、この意見を交換するというのが、人権こども塾の基本的な活動内容の一つです。

では、素敵な発表の後に水を差ししてすみません。どなたか、語りたい方いらっしゃいますでしょうか。(挙手されたメンバーに手を伸ばし、発表を促すように)お願いします。

《ゆづき》

(ゆっくり立ち上がり)ゆづきです。ボクは「人権こども塾」に出会ったのって中学1年生の時、(懸命に言葉を探しながら)それまでの、小学校まで心に秘めていたもののようなことがあって。それが、この「人権こども塾」とかに出会って言えるようになったんです。

その1つで言えるのが、ボクには、「障がい」を持つ兄がいて、小学校までは、友達にもそんなに言っていない。 (マイクを両手で握り、一生懸命言葉を探しながら)例えばスーパーなどに行った時、兄と一緒に買い物とかするんですけど、その時に他人からジロジロ見られたり、そういうのがボクは嫌で、すごく不愉快な気持ちで。兄にはちょっと失礼なんですけど、「兄なんか、スーパーに連れて来なくてもいいのに…」と思っている部分もありました。

そう思っていたんですけど、中学校になって、「人権こども塾」に出会って。人前に立つのあまり得意じゃないんですけど、この場の雰囲気っていうのがすごく良くて。「まあ、話してみようかな」って思って、話してみたらすごくスッキリして。なんか、「ああ、言ってもいいんだ」ってなりました。

(マイクの音が小さく、司会者がそっとマイクを交換する)で、その時に、(言いにくそうに、言おうかどうかと懸命に葛藤しながら、思い切ったように)兄が今まで嫌いだったけど少し、何て言うんだろう。兄が居ることが、ちょっと変になるかもしれないんですけど、兄の存在っていうのが、今までは居ない方がいいって思ったんですけど、今は、ずっと居て欲しいっていう気持ちがあつて。

なぜかって言ったら、兄って、すごい純粋なんで

すよね。笑う時はすごく大きく笑って、怒る時は、すごくうるさいくらい怒るんですけど、(何度も言葉を探しながら)その純粋なところがボクは好きで。そういう純粋なところがある兄が居るっていうことに自信をもってというか、誇りに思ってます。

多分、「人権こども塾」に出会えていなかったら、そのままずっと兄のことが嫌いだったんだろうなと思います。「人権こども塾」で兄のことを話したんですけど、他にもいろんな場所に行って、部落差別とか冤罪についても学んで。この「人権こども塾」に入って、今まで視野が狭かったんだなあって思えて、もっと広い目でたくさんの知識を入れられるようになって良かったと思います。ありがとうございます。(拍手)



《進行:藤原莞大》

ありがとうございました。次、語りたい方。(意思表示したメンバーにマイクを渡す)

《かな》

(まっすぐ前を見ながら、はっきりとした語りが始まる)私が、この「人権こども塾」に参加する前に、「人権を語り合う中学生交流集会」という方に私は参加をしたんですけど。その集会に参加するきっかけが、当時、私がその学校に入った時は中学1年生の時なんですけど、1学期の時に学級委員で、委員会は人権委員会だったんです。

それで、その時に吉成先生から、「こういう集会に行かないか」みたいな誘いがあつて。最初は「人権委員会に入っているから、これは行かないか」とい

ないのかな」という、ちょっと何って言うんでしょう。義務みたいところが最初はあったと思うんです。最初の数か月間は、「人権委員だから行かなきゃ」みたいな感じで思っていたんです。

けど今は、自分から「人権って学ぶことすごく大事だな」とか、「みんなと自分のことを語り合えるのって、すごい良いことだなあ」って思っています。それに、先日、吉成先生の本、「ナツノオト」っていうのを読ませていただいたんですけど、その主人公の家庭環境が私と通じるところがあるなあと思っています。自分と重ね合わせながら読んでいたんですけど、私は、その自分の家庭環境で悩んでいることだったりとかを、この「人権こども塾」に参加するまでは、ずっと1人で抱え込んでいて。

友達に話そうとしても、そこまで話していた内容とかで盛り上がっているのに、そういう話とかを相談しようとしたら、その空気感とかを壊してしまうんじゃないかとか、いろいろ怖いところがあって話せなくて。

だったら自分で、ずっと1人で考えていた方がいいんじゃないかなっていう感じで思っていたんですけど。ここにいる人たちは、そういう話をしても温かく受け入れてくれる人たちなので、そういう恐怖感とかなくして話せたなあと思います。なので、この「人権こども塾」に参加して良かったなあと思います。(拍手)



《進行:藤原莞大》

ありがとうございました。次、話したい方。(壇上の意思表示が途絶えたところで、隣にいる司会者

と言葉を交わしながら、司会者の有井さんにマイクを渡す)

《アッチャン》

(いっぱいの笑顔で)こんにちは。アッチャンと言います。ボクが、「アッチャン」と呼ばれ始めたのは、幼稚園の頃なんですけど、(当時に思いを馳せながら)ボクの通っていた幼稚園・小学校がとっても人が少ないところで。幼稚園だったら、全員で7人とか、5人とか。小学校でも、松茂町にある長原小学校っていう所なんですけど、今が全校生徒7人なんですよ。

そこに通っていて、人が少ないから、他学年とかいうのじゃなくて、「全校が家族」みたいな。「みんな友達」みたいな所だったんですけど、「アッチャン」と呼ばれ始めたのは幼稚園の時です。その時は、めっちゃめっちゃ嫌だったんです。「アッチャン」って呼ばれるのが。

何でかって言ったら、「ちゃん付け」されるのが嫌で、その当時は。ボクが「ちゃん付け」されるのを、女の子みたいだなと思っていて。それも小学校に上がるくらいには定着したんですけど。「ちゃん」が女の子っていうのは、(一言一言を自分の中で確かめるように)今考えればすごい、ボクの勝手な思想で。別にボクが「アッチャン」って呼ばれたり、ゆづきが「ゆづきちゃん」と呼ばれたりするのは全然いいし、覚えやすいし。今考えれば、「いいじゃん」って思うんです。

けどやっぱり、人だからすごく偏見を持ってしまっていたなあっていうのを、今考えて思います。

というのは置いておいて、ボクは「障がい」者です。はい、ボクは「障がい」者なんですよ。

何の「障がい」かって言ったら、「吃音」っていう「障がい」を持っていて、もう、知っている人もいると思うんですが、前に、「ボク、吃音ですよ」ということを、中学校300人くらいいるんですけど、発表したんです。「ボク、『吃音』っていう『障がい』者です」っていうことを言いました。

ボクは今、生徒会長をやっているんですけど、言

う前までは、正直すごく怖くて、『『障がい』者です』って言った瞬間に、『『障がい』者だって？もう関わってくるな』みたいに言われるかなってということも考えていて、とても言うのが嫌だったんですけど、でも、森口先生に「言え！」って言われて、(照れくさそうに)言ったら、案外、「へえ～、そうなんだ』『『障がい』者だって。へえ～』っていうふうに、みんなが受け止めてくれて、そこからは、とても軽くこの「吃音』っていうのを出せる環境になりました。

なので、案外、「自分がこれを言ったら、絶対だめだろうな」ということも、ボクは森口先生に言われてだったんですけど、伝えたら、結構みんな真剣に受け止めてくれて、聞いてくれて、そこからは変な空気にならなくなったというか、自分が言ったり語ったりすることによって、周りの人も変えられるんだなということ、この「人権こども塾」に来たり、いろいろな所で発表するようになってから、思い始めるようになりました。これからもみんなを変えていければいいなと思います。ありがとうございました。(拍手)



《進行・藤原莞大》

ありがとうございました。次、語りたい人。(壇上のメンバーを見渡ししながら、意思表示がない中で、アツチャンと言葉を交わし)私が語ってもいいですか？

《ちーさん》

何度も何度も話してしまって申し訳ないです。改

めて、ちーさんと言います。名前が自分で作った名前なんですけど、私はちょっと原稿を書いているので、読ませてもらいます。

(スマホに書かれた原稿を読みながら、ゆっくりと)私には、1つの夢があります。その夢は、中学校3年生の時に、初めてできた夢でした。それは、「水族館で働く」という夢です。

当時、中学校3年生の時、私は不登校でした。その不登校になった理由も、病気だったり、コロナとかが広がって、気がめいってしまって不登校になったという感じなんです。「水族館に行こう』っていう話が、ふと、自分とか不登校の友達の中で起きて、水族館にふらっと寄ったんです。近くの神戸の、「須磨水族館』という所です。

行った時に、ごっつい感銘を受けて、「ああ、ボクはこの世界で生きるしかない』って思ったのが、この夢のきっかけなんです。でも、最近その夢が叶いつつある。それにはいろいろきっかけがあって、元々は水族館で働くこと自体が夢だったんです。なので、高校受験も頑張りました。(自分の制服を示しながら)この、科学技術高校のマーク。「科学技術高校の海洋科』という所に入って、夢に近いところをひたすら進んでいるところなんですけど、生き物に触れる機会が増えたんです。

(前を向きながら、思いを込めて)科学技術高校で、自分で生き物を飼ったり、水族館や釣りに行ったり、そういった触れる機会が増えて、生き物の強さを思い知ったんです。

ボクの今飼っている「ベタ』っていう魚がいて、イメージしていただけますかね。ヒラヒラの(きれいな)尾ひれがついているんです。最近、その子がヒーターにその尾ひれをひっかけて、綺麗な尾ひれがちぎれてしまったんです。それで、「ああ…」とか思って、内心パニックに陥って、その子はぐったりしているんです。ボクはふと、「そうや、えさをやったら元気が出るかもしれん』と思って、えさをパッとあげたんです。尾ひれがちぎれるっていうのは、人間だったら手がもげるとか足がもげるような状態で、「餌は食べてくれんわな』と思いながらあ

げたら、食べに来たんです。ボクにとったらごっつい驚きで、「ああ、そうか。この生き物たちは、足がもげようと何が起きようと、生きようとしているんだな」というのを、ここで一気に感じたんです。

それだけじゃなくて、東京の方に行って、水族館を勉強に回ったんですけど、その中に1カ所、シャチがいる水族館があるんです。(楽しそうに声を弾ませながら)そのシャチのジャンプの雄大さを見てから、シャチに取りつかれてレポートを書きまくるとか。そんな生き物の素晴らしさについて、たくさん知る機会があったんです。

で、私は思ったんです。この世界は素敵なんです。絶対に。(時々スマホの原稿に目をやりながら)その、生きようとする生き物がいて、誰かを幸せにしようとする人間がいて、綺麗な森があって、山があって、「文化の森」だったら、さっき時間があって博物館に行ってきたんですけど、いろんな歴史があったり、感動的な世界がここにはあって。そんな世界に、ボクたちは「人権」というか、「命」を持って生きている。

なので、何て言うんですかね。ボクらは素敵なんです。絶対に。なので、自分から命を手放すこととか、人間を互いに傷つけ合うこととかは、基本的にボクの今の理に反するんです。生き物の素敵さというものを裏切ってしまうことになるんです。

ボクの今の夢は、「誰かを救う水族館をつくる」になったんです。誰かを楽しませて、昔の、不登校から引っ張り上げてくれた水族館みたいに、誰かを救う何かをつくって、「ボクだって素敵だ」みたいに思うようになったんです。

こう思えるようになったのって、(笑顔で生き生きと)何かを好きになって、それを愛し続けて、探求して、学校にも行って、生き物も飼って、その思いをどんどんどんどん強めて、突き詰めていったからこそ、この結果が見えてきたんです。なので、ボクがこの、「人権」というものを学ぶうえで、考えたいのが2つ。

1つは、「何事も見逃さない」「何事も拾って自分のものにする」。誰かの話、見たもの、聞いたこと、

出会ったもの、それらを見続けて、この世にある素敵をたくさん見ていくこと。これはボクの夢の1つでもありますし、生きるというか、人権を考えるうえで、何かを思っただけで上げるっていうのは、絶対大事なことで。

2つ目が、「何かを愛すること」。それをやめないこと。ずっと何かを探求すること。そうやって、ボクらは、他人であれ生き物であれ、環境であったり、社会であったり、それらを、より良く素敵にしていけるんじゃないかなと思っています。それが私の夢です。ありがとうございました。(拍手)

《進行・藤原莞大》

次の方。(壇上のメンバーで意思表示のあった人にマイクを渡す)

《N村》

(笑顔の中で、ドキドキしながら)ああ、めっちゃ緊張するわ。N村です。呼んで欲しい名前の方は、去年の1年生の時に、すごい大好きな担任が付けてくれて、これを気に入っているのでもうこの名前にしました。



私が話したいなと思うことは、「人権」について興味を持ったきっかけを話したいと思います。(緊張で声が震えながら)ああ、足が震える…。

(思い切ったように前を向き、マイクを両手で握りしめながら)私は結構、周りの友達に恵まれているし、親ともケンカはあるけど、そんな「家出」みたいなすごいケンカとかないし、小学生の頃だって、テストの点以外は怒られることはなかったし、学校

に行くのもすごい大好きな子だったので、「人権」
ていうのをあまり意識したことはなかったです。

で、私が「人権」を意識するきっかけになったの
が、中1の頃にあった人権作文を発表するやつで。
私はそこで、「LGBTQ」について書いたんです。そ
それで、私がクラスで人権作文を発表する子に選ば
れて。私はすごく話し言葉をすごい作文で使ったし、
ユーチューブで得た知識をそこに書いていただけだ
たので、こんな選ばれんだろうって思ったんですよ。
でも、結構クラスみんなが、「LGBTQ」を書いた
私の作文に、「ええやん」「ええやん」「やっぱりす
ごいね」みたいにすごく褒めてくれて。私、結構、
褒められたら調子に乗っちゃう子なので、「え？私
すごいんじゃない」と思って、体育館であった学年
の意見発表会で発表したんですけど。それで結構、
「ああ、私すごいんだ」みたいに思って。発表す
ること自体はきれいとか苦手だけど、話すことは
結構好きだったから、その学年の前で人権作文
「LGBTQ」について読む時も、ドキドキしながら、
けど周りを見たら、うなずいてくれる子とかもいた
し、読み終えてクラスの所に戻ると、「すごいね」
ってみんなが言ってくれるので、「すごい」「ああ、
楽しいな」って思いました。

そこから、中1の終わりくらいの時に、担任から
「人権こども塾に入ってみない？」って言われて。
入ろうって思ったきっかけは、お菓子が出るからな
んですけど、今となって思ったのは、「入ってよか
った」って思っています。

(横に並ぶメンバーを見渡ししながら、ニコニコと)
違う学校の子とも会えたし。「味噌汁」とか「クマ
ガヤ」と仲良くなれたり。まあ、勝手に思っている
んですけど、仲良くなれたりして楽しいなあとか、
交友関係が広がるのがすごく嬉しくて。ここに入
ってよかったって思っています。ありがとうございます。
(拍手)

《進行・藤原莞大》

ありがとうございました。次、語りたい方。(手
を伸ばし示しながら)どうぞ。

《味噌汁》

(司会者の声を受けて、N村さんが、隣の登壇者
に何度もうなずきながら、発言を後押しする中で、
恥ずかしそうに立ち上がり)こんにちは皆さん。「味
噌汁」です。名前の由来はないんですけど、最近、
味噌汁が滅茶苦茶美味しいっていうことに気づい
て、「味噌汁」っていう名前にしました。(楽しそう
に声を弾ませながら)最近の味噌汁は、サツマイモ
が入っていて、滅茶苦茶甘いので、皆さん、良か
ったらサツマイモを味噌汁にぶち込んでください。(会
場に笑いがこぼれる)



(緊張に少し声が震えながら、懸命に)私は元々、
「人権」なんか興味がなくて、森口先生に誘われて
入ったっていう感じなんですけど。「人権」なんか
家族とあまり話したことがなくて、ニュースとかで
いろいろな事件があったっていうことを話してい
たくらいで。でも、前にあった人権交流会で、みんな
一生懸命しゃべっていて、「わあ！自分的にはすご
いなあ！」とっていて。それで、ずっと言えな
かったこととかを他のみんなは言えていて。

あと、いろんな交流会、愛媛の「四国朝鮮学校」
に行っ。あと八万中学校の皆さんともいろんな関
わりがあって、友達がたくさん増えて、滅茶苦茶嬉
しくて、「人権こども塾」に入って良かったなって
思ったし、交流会とかでも、大変な人とかの話も
たくさん聞いて、やっぱり知っておいて良かったな
って思ったし、家族にもたくさん報告できて、すご
い嬉しい思い出になりました。ありがとうございました。
(拍手)

《シモヤマ》

(味噌汁さんの語りが終わると、立ち上がり)シモヤマです。「人権こども塾」に入ってよかったなって思っています。

私元々、人権のことがよくわからなくて、ちょっと、吉成先生に誘われて入ってみました。(緊張に声が出にくく、何度も小さく咳をしながらも、懸命に言葉を探し語り続けていく)初めは人前で話すことが苦手で、みんなと話すことがちょっと難しいな、怖いなと思っていました。

でも、最近はこの「人権こども塾」のおかげで、人前で話すことがちょっと楽になって、「人権こども塾」のおかげだなんて思います。「人権を語り合う中学生交流集会+23」の場所でも、みんなと話す時に、(少し言いにくそうに、それでも思い切って)小学校の時に差別をしてしまったことを話したことがあるんです。

小学校の高学年の時に、外国人が転入して来て、その時に同じクラスだったんです。それで、一緒に遊んだりとかする時に、友達とかもおって。その友達が、差別発言みたいなのをしてて。それで私は何も言えなかったんです。そのことがあってから、関わるのが怖いっていうか、ちょっと嫌って思っていたのか、冷たい態度をとってしまったんです。その外国人の子に。それがあって、その子に申し訳ないことをしたなって、無茶苦茶思ったんです。

その話をした時に、聞いていた人たちが「辛かったねえ」とか、「話してくれてありがとう」みたいなのを言われて、すごく嬉しくて。中学生になって、辛くて。今まで話せなくて。家族にしか話せなくて。周りの人にちらっとしか話せなくて。すごく緊張していて。すごく泣きそうだったんです。嬉しくて。

「人権こども塾」でも、「人権を語り合う中学生交流集会+23」でも、こうやって自分のことを話すきっかけとなって、すごい良かったなって思っています。今は、外国人と話したりとか、外国人のことが大好きで、差別してしまったことを後悔していません。

(困ったように)話がまとまってないですけど、このことを話せて良かったなって思いました。いい機会になって、これからもたくさん「人権」のことで話したいと思いました。ありがとうございました。

(拍手)

《進行・藤原莞大》

ありがとうございました。次の方。お願いします。

《クマガヤ》

私は、クマガヤと言います。(ネームプレートのイラストを示しながら)ここに小っちゃいパンダがいるんですけど、この子が「クマガヤ」っていう名前前で、だから使いました。

(まっすぐ前を向き、とつとつと語り始める)私は、今年の6月くらいに初めて「人権を語り合う中学生交流集会+23」に参加しました。学校の人権作文を発表する時に、森口先生から、「中学生交流集会で発表してみないか」みたいなことを言われたので、6月くらいに初めて行きました。みんながすごい私の発表を聞いてくれて、感想とか言ってくれたりしたので、すごい嬉しかったです。

そこから「人権こども塾」とかにも行き始めて、人権のことに興味を持ちました。学校で人権作文を発表する時に、あまり読む気になれなかったというか、「こんな作文でいいのかな」みたいにずっと思っていて。まず、学年で発表する時に、8人くらいで発表して、その中で全校生徒の前で発表する人を決めるってなって。もう選ばれんだろうなって思っていたら、選ばれて。最初は、あまりこういう発表とかしたら、何て言うんだろう、(少し考えながら)あまり良くないかなというか。自分の書いた作文の内容が、みんなにちゃんと聞いてもらえるかなとか思っていたんですけど、学校で発表した時も、「中学生交流集会」で発表した時も、みんながちゃんと聞いてくれて、これでいいんだって思いました。

来年も多分作文を書くと思うけど、その時も、内容を深くっていうか、何て言うんだろう。今年はお自分の家族のことを書いたけど、来年はもっと、いろ

んな人に共通するような内容を書きたいと思いません。ありがとうございました。(拍手)

《進行・藤原莞大》

ありがとうございました。これで前にいる方々は全員話せましたか？どうでしょうか。この熱意というか、みんなが話す、何て言うんでしょうか。やっぱり、「熱意」ですね。心というか、魂のこもった語りをしてくれた子もいました。それではですね、今から後、10分ほどありますので、まだ話したい方いますか？あ、じゃあ、お願いします。マイクをお願いします。

《ゆづき》

ちーさんの話を聞いていて、ボクにも夢があって。海洋生物学者になることなんですけど、元々、何でその夢を持つかって言われたら、元々海洋生物が好きで。いつも水族館とか行って。心の底から好きで満たされていて。将来こういう海洋生物について研究する職業に就きたいと思って。

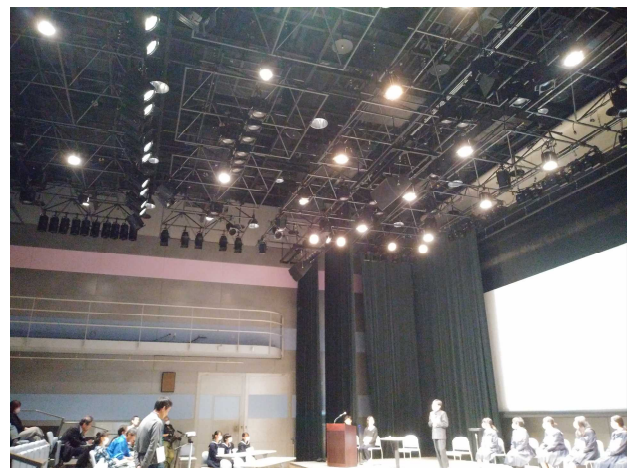
そういうのも1つだったんですけど、その職業に就く理由が最近変わり始めてきて。その変わってきた理由というのが、(一言一言を言葉を探しながら)多分、ボクのお母さんのおかげだと思うんです。お母さんの影響だと思うんですけど、この話、お母さんがいないので、言っているのかわからないんですけど、まあ、ちょっと言いたいので。

ボクのお母さんは、ヴィーガンという人で、動物性のものを食べない人です。1年くらい前からそんなのを言い出して、県外とかで、ヴィーガンフェス(ヴィーガングルメ祭り)みたいな、そういう、動物性とかを使っていないおいしそうな食べ物がいっぱい売っている祭りみたいなのがあって、そういう所とかに行っていたんですけど。それで、ボクも興味をもって、調べてみたり、お母さんに聞いたりしていたんです。

「お母さんは、何でヴィーガンになったん？」って聞いたんですけど、そしたら、お母さんは動物が好きで、昔、犬とか飼っていたらしいんですけど。

例えば、「牛」あの美味しい焼肉とか。美味しいですね。牛の肉って。牛肉ができるまでの工程で、その動画見たらしいんですよ。その残酷な映像を。牛を殺すために誘導する時に鞭とか打って、その後宙づりにして首を絞めたりとか。いろいろすごく残酷なことをして、そういう映像があったらしいんですね。お母さんはそれを見て、「わああ…」ってなったらしくて。そういうのを見て、動物たちが痛い思っているか、そういうことをしている動画を観て、ヴィーガンになったらしいんです。

けど、そこから自分も調べてみたりして、例えば、イルカショーの話なんですけど、イルカを捕獲する時、だいたいイルカショーに出ている個体というのは確か若いイルカで。海からとってくる時に、例えば家族がいたとしたら、それを人間が獲る時に若い子どもだけを獲って、残りのお父さんとかお母さんを殺して、唐揚げとか、そういう肉にするらしいんですね。なんか、それを聞いたら、これって幸せな生活をしている時に、急に、勝手に外国の人間が襲ってきて、しかも、お父さんお母さんを殺されて、自分も、かわいそうだなと思って。その後、若いイルカは運ばれて、水族館でイルカショーをするために、すごい技を教えられたり、させられたりしているらしいんです。



また、水族館で生まれた子どもがいると思うんですけど、その子たちって多分、イルカショーをする水槽の中でしか生きることがなくて。こんな広い海が世界中にはあるのに、たったそこだけで生活しているって、なんかかわいそうじゃないですか。捕ら

えられなかったとしたら、この先、広い海で優雅に暮らしていたと思うのに、人間に捕まえられて、イルカショーのために働かされて。そういうのがちょっとかわいそうだなと思って、ボクも最近イルカショーが見れなくなって、そういうのを思うようになって。

他にも動物って肉食系とか、例えば、これは聞いた話ですが、ハイエナとか、体重とか測らなくちゃならないじゃないですか。健康チェックみたいに。体重って測る時にじっとしてなきゃならないじゃないですか。でも、動物なんて簡単に言うことを聞かないということで、麻酔を打つらしいんですよ。それを聞いて、かわいそうだなと思ったし、もっと他にないのかなと思っちゃうんですよ。だから、もっと動物のことを考えて、「動物を何だと思っているんですか」と思ってしまうんですよ。ちょっと話が全然まとまっていないんですけど、ボクは、そういう商売目的で動物を取り扱うっていうのが本当に嫌いで。

まあ多分、そういうことじゃなくて、動物が伸び伸びと、できるだけ自然に生活できる環境を作り出すために、いろいろ工夫しているっていうのもあると思うんです。動物園とか水族館とかあると思うんですけど。それでも、動物とか海洋生物って謎の所っていっぱいあるんです。その時に自然界でどう暮らしているのかわからなくて、その展示をする時に、その生物の負担になってしまうと思うんです。ちょっとわかりにくいかもしれませんが。だからこそ、ボクはそういう生物の謎を解いて、水族館とか、動物園とかで、動物たちが伸び伸びと、できるだけ自然に居る状態で暮らしていけるように、そういう謎を解いていくために、海洋学者になろうかなと思ったんです。そういう意味でやっています。ありがとうございました。(拍手)

《進行・藤原莞大》

ありがとうございました。お時間となりましたので、これで第1部の人権こども塾「自分を語る」学習会発表会を終了し、休憩の時間とします。第2部

は2時からとなりますので、第2部が始まるまで、少しお待ちください。

